様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：３４６０２
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３２７７

研究課題名（和文）民俗芸能における演技の創造性に関する民俗学的研究

研究課題名（英文）Folkloristic Study on Performance Creativity in Folk Performing Arts

研究代表者
松岡　薫（MATSUOKA, Kaoru）

天理大学・人文学部・講師

研究者番号：９０８２４３５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、演技の一回性・即興性を特徴とする俄（にわか）という民俗芸能を対象とし、演者と観客のやり取り、演技に対する評価のあり方、演技の制作過程等に注目し、民俗芸能の演技がいかに創造されているのかを検討した。本研究課題を検討するために岐阜県美濃市、大阪府富田林市、熊本県阿蘇郡高森町の3地域で調査を実施した。
その結果、俄の場合、1）その地域の方言やその地域内で共有されている具体的な地名・人物を用いて演じることで、時事的な話題をローカルな文脈に置き換えていること、2）演技の創造過程において、芸能を「見る」観客にくわえ、地域によってはプロ（専業）の芸人の影響関係も注目する必要があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、観客という「見る」人々の存在を導入することによって、芸能実践の根幹である演者や観客といった人々の存在に焦点をあて、これらの人々が織りなす芸能伝承の複雑な動態を明らかにした。観客たちが地域固有の価値や審美の基準をもとに演技を評価するプロセスは、一般的な芝居に対する評価の基準とは異なるものである。こうした地域固有の価値観を共有した演者－観客の存在が民俗芸能の演技の創造性に大きく寄与していることを明らかにした点は、当該領域の発展を図るものである。

研究成果の概要（英文）：This study examined how performances in folk performing arts are created, focusing on the interaction between performers and audiences, their evaluation of performances, and the process of creating performances. Fieldwork was conducted in Mino City, Tondabayashi City, and Takamori Town, Aso Ward, focusing on the folk performing art of Niwaka, which is characterized by the ephemeral and improvisational nature of its performances. The results revealed the following: (1) local dialects and specific place names and characters shared within the region are used in the performances, thus putting current issues into a local context; (2) in addition to the audience " watching" the performance, it is necessary to pay attention to the influence of professional (full-time) performers in the performance creation process in some regions.

研究分野：民俗学

キーワード：民俗芸能　俄　演技　創造性　即興性　大衆芸能

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

今日の民俗芸能研究では、芸能の伝承を固定的で本質的なものとする古典的な想定を乗り越え、社会的なプロセスのなかで芸能の動態を解明するという課題が広く共有されている。しかしながら、先行研究では舞や踊りといった決められた身体動作を基本とする民俗芸能を主な研究対象としてきたため、「型」と呼ばれる固定的な演技の存在が暗黙の前提とされ、結果的に演技の定型性や連続性が強調されることとなった。くわえて、これまでの研究では演者や演者集団といった芸能を「演じる」主体に分析対象が偏っていたため、演技を「見る」という行為からの検討が不十分であった。

そこで、本研究の目的は、「民俗芸能の演技がいかに創造されているのか」という問いに対し、演者・観客間の「見る－見られる」関係という視点から、周囲の環境と不可分な身体技法としての演技の動態性を考察することで、民俗学の新たな芸能伝承論を提示したいと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、「民俗芸能の演技がいかに創造されているのか」という問いに対し、演者・観客間の「見る－見られる」関係という視点から、周囲の環境と不可分な身体技法としての演技の動態性を考察することで、民俗学の新たな芸能伝承論を提示することである。

そこで、本研究では申請者が大学院生時から継続して調査研究している俄（にわか）という民俗芸能を対象とする。俄とは 10 分程度の滑稽芝居で、世相風刺や機知に富んだ笑いの表現を盛り込むという特徴がある。毎年演目が作られ、一夜限りの演技であることを特徴とするため、常に新たな演技が作られるという特徴ももつ。かつ、観客を「笑わせる」という演技の特性上、演者たちは稽古・本番を通じて、常に観客の視線を意識している。これまでの調査において、演技の最中には観客からのからかいや野次に演者が応答するという様子も観察できた。このように、観客が常に上演の場に介在していることにくわえ、即興的に演じられる俄は、「見る－見られる」という関係性から演技の動態を描き出そうとする本研究にとって適切な研究対象である。

３．研究の方法

本研究では、過去の調査資料を活用するため、すでに調査研究に着手している３地域（岐阜県美濃市、熊本県阿蘇郡高森町、長崎県新上五島町有川郷）を調査地とした。これらの地域は、毎年演技が新たに作られる点で共通する。だが、岐阜県美濃市と熊本県高森町の俄は、笑いに特化し世相風刺の側面が強いという芸態の特徴にくわえ、「俄コンクール」という審査会が 20 年以上にわたって毎年実施され、町内同士で競い合っている。さらに、コンクール目当てに町外から多くの観客が集まる。他方で、長崎県有川郷は島嶼部地域という地理的環境もあり、観客も地域住民に限定され、コンクールの開催などによる集客も見込めない。このように上演環境が異なる地域の調査資料を活用することにより、汎用性の高い芸能伝承のモデルを構築できると考えられる。具体的には、上記の３地域において、民俗学のアプローチに基づく資料収集（祭礼時期に実施するフィールドワークや聞き書き、現地で収集した文書資料の解読）を行い、課題に取り組むこととした。

しかしながら、本研究課題がスタートした 2020 年度より covid-19 の世界的流行によって、日本国内での移動が大きく制限され、さらには現地調査を予定していた祭礼全てにおいて行事の執行が中止されることとなった。2022 年度以降は徐々に祭礼も再開され、行動制限も緩和されることとなったが、当初予定していた 3 地域のうち、離島である長崎県新上五島町有川郷での調査を取りやめ、かわりに居住地の近距離で伝承されている大阪府南河内地方の俄を新たに調査地として設定した。

現地調査が制限された期間においては、これまでに筆者が撮影した俄の上演映像を活用し、俄の上演形態についての全国的な比較検討を行った。また、俄の演目内容（題材、登場人物、粗筋）や演技中の台詞や所作、「落とし」と呼ばれる締めの言葉（落語のサゲにあたる掛け言葉）といった点を抽出し、分析を行うこととした。

４．研究成果

本研究は、covid-19 の世界的流行の影響により当初の予定を 1 年延長し、2020 年度から 2023 年度にかけて実施した。4 年間における研究成果は次のとおりである。

（1）どのような内容の俄がいかに演じられているのか、俄の演目内容や台詞から検討した結果、多くの地域において、①その土地の言葉である「方言」での演技を重視していること、②話題のニュースや世相を題材に扱う場合においても、その演技において地域の具体的な地名や店名、地域に関わりのある人物名などを登場させることが明らかになった。これは、その地域の方言やその地域内で共有されている具体的な地名・人物を用いて演じることで、時事的な話題をローカルな文脈に置き換えていると指摘できる。

くわえて、その演技においては独特のイントネーションで台詞を発する地域や、町外の芸人や俳優が混じることへの違和感が聞かれた地域もあった。他方で、通常の芝居ではタブーとされるようなアクシデントや失敗については、俄らしさとして好意的に受け入れている様子もみられた。こうしたことから、これは、俄の演技が一般的な芝居の演技とは異なるもので、普遍的な演技へ統合されることへの抵抗であるといえる。そして、俄を「見る」観客たちも、普遍的な演技とは異なる、俄らしい演技を評価し求めているということが明らかとなった。

（2）上演された俄の演目、題材、台詞等について、熊本県高森町、岐阜県美濃市、大阪府富田林市の 3 地域を比較した結果、熊本県高森町や岐阜県美濃市においては前述した（1）の演技が観察された一方で、大阪府富田林市では方言の使用は抑えられ、演目も股旅物や任侠物を題材にした時代物が多く選ばれていた。地域を舞台とした演目も多く、俄の演技をローカルな文脈に置き換えることはあまり重視されない。こうした違いの背景として、プロ（専業）の芸人の影響関係があるのではないかと推察する。大阪府富田林市周辺での聞き取り調査の結果、この地域では近隣に住む大衆演芸の芸人（浪曲師や河内音頭の音頭取りなど）が青年達に演技の指導を行ったという事例や、かつてプロの喜劇一座へ俄の演技を習いに行ったといった事例が採集できた。

こうしたことから、演技の創造過程において芸能を「見る」観客にくわえ、地域によってはプロ（専業）の芸人の影響関係も注目する必要があるということを指摘した。民俗芸能におけるプロ・アマによる演技への影響については、俄に限らず多くの民俗芸能に応用することができるため、今後研究を発展させていきたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 松岡薫	４．巻 312
２．論文標題 持続可能な民俗芸能の継承にむけて―担い手の視点から	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本民俗学	６．最初と最後の頁 192-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松岡薫	４．巻 25
２．論文標題 北部九州地方における芸人の興行活動―熊本県の俄（にわか）を事例に	５．発行年 2022年
３．雑誌名 天理大学人権問題研究室紀要	６．最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松岡薫	４．巻 27
２．論文標題 南河内地方のだんじり俄―富田林市美具久留御魂神社秋祭りを事例に	５．発行年 2023年
３．雑誌名 古事	６．最初と最後の頁 35-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松岡薫	４．巻 32
２．論文標題 俄の演技と伝承―北部九州地方を事例に	５．発行年 2024年
３．雑誌名 説話・伝承学	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 松岡　薫
2．発表標題 地方で芸人として生きる ―ある肥後にわか師への聞き書きから―
3．学会等名 日本民俗学会第74回年会
4．発表年 2022年

1．発表者名 松岡　薫
2．発表標題 俄はヴァナキュラー芸能なのか？―熊本県南阿蘇地方の俄から考える―
3．学会等名 現代民俗学会第66回研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 松岡薫
2．発表標題 民俗芸能の演技と伝承―熊本県南阿蘇地方のにわかを事例として―
3．学会等名 おやさと研究所第340回研究報告会
4．発表年 2021年

1．発表者名 松岡薫
2．発表標題 俄を演じる人々―娯楽と即興の民俗芸能―
3．学会等名 京都民俗学会第335回談話会
4．発表年 2021年

１．発表者名 松岡薫
２．発表標題 俄にみるドラマ性とは何か―熊本県阿蘇郡高森町の俄から考える―
３．学会等名 日本演劇学会2021年度研究集会パネル「ドラマか非ドラマか？―地域市民演劇としての俄を考える」
４．発表年 2021年

１．発表者名 松岡薫
２．発表標題 北部九州地方における芸人の活動実態―熊本県の俄（にわか）を事例に―
３．学会等名 天理大学人権問題研究室公開研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 松岡薫
２．発表標題 南河内地方のだんじり俄
３．学会等名 第32回天理考古学・民俗学談話会
４．発表年 2023年

１．発表者名 松岡薫
２．発表標題 俄の演技と伝承―北部九州地方を事例に
３．学会等名 2023年度説話・伝承学会春季大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 松岡薫
２．発表標題 グループ発表「交じりあう芸能世界」趣旨説明
３．学会等名 日本民俗学会第75回年会
４．発表年 2023年

１．発表者名 松岡薫
２．発表標題 俄にみるプロ／アマの接触・交流・併存（グループ発表「交じりあう芸能世界」）
３．学会等名 日本民俗学会第75回年会
４．発表年 2023年

１．発表者名 松岡薫
２．発表標題 各地のにわか（南河内の「にわか」―これまでとこれから）
３．学会等名 南河内の芸能にわか・実演とシンポジウム
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 松岡薫	４．発行年 2021年
２．出版社 森話社	５．総ページ数 280
３．書名 俄を演じる人々―娯楽と即興の民俗芸能―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関